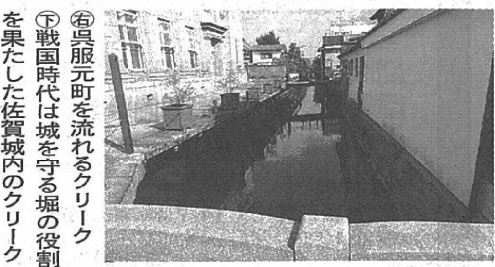


日本有数の稲作地帯である佐賀平野は有明海の湾奥部に発達した沖積平野である。この平野は有明海湾奥部に筑後川をはじめとする河川群からの流入土砂の堆積によって1年に10層の割合で干潟が発達し、その干潟を飛鳥時代から行われてきたという干拓等によって陸化することで成長してきた。その佐賀平野を網の目のように流れる「クリーク（農業用排水路）」は総延長2000キロとも言われ、全国的に見ても独特の風情を醸し出している。

水害と干ばつ

佐賀平野はクリークで辺り一帯が覆われているため、水が多い地域と思われがちである。しかし、実際には「降れば



④呉服元町を流れるクリーク
⑤戦国時代は城を守る堀の役割を果たした佐賀城内のクリーク

洪水、照れば干ばつ」という非常に厳しい自然環境下にある。

～文化的歴史的所産を巡る～ 残したい情景

第34回 佐賀県



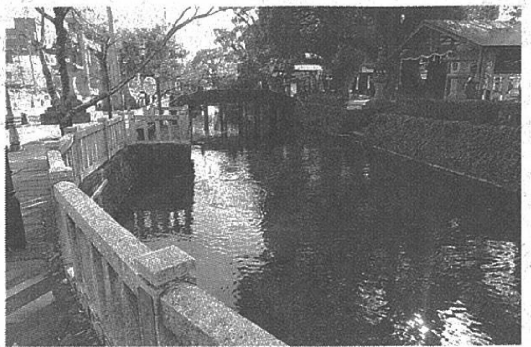
一般財団法人 日本不動産研究所

り、水害と干ばつは佐賀平野の宿命であった。それは、佐賀平野は山が浅く平野が広いため十分な集水面積を持つ川がないこと、また、ここの山々は花崗岩でできているため、マサと呼ばれる風化した土砂を多く排出し保水力が乏しいことが原因と言われている。

しかも有明海はどんどん南に退き、沖積平野は沖へ沖へと広がるため、山から出て平野を潤す河川はその能力以上の水の供給を要求されることになる。そこで先人たちは知恵を絞

洪水のときに、農地や集落が浸かっ てしまわないように、増水した水をため込むことである。

佐賀平野は海拔が低く大雨と有明海の満潮が重なる と雨水を海に排水できなくなってしまうため、たびたび洪水に見舞われていた。現在も佐賀市では大雨の予報が出ると水門を開け、あらかじめクリークの水量を減ら



クリークは佐嘉神社周辺にも張り巡らされた

佐賀平野に広がる2千キロのクリーク

見直されるべき防災機能

り地域農業を支える重要な仕組みとして「クリーク」の整備を進めてきた。そのほか、クリークは歴史的な視点で見れば、戦国時代にはお城を守るお堀の役割も果たし、更に、人々は交通手段が乏しかった時代にはクリークを小舟で移動し、有明海で大型船に乗り換えて、大阪や東京に向かうための水運としても利用している。

多機能なクリーク

一番大きな役割は稲作のための水源を確保すること。佐賀平野は沖へ沖へと延びて水源地から次第に離れていくため農業用水が不足する。そのため、雨が多くの時期に余った水をクリークにため込んで、雨が少ない時期に使用するの

もう一つの大きな役割は、

維持保全の今後

高度経済成長期にクリークの維持管理は粗放化され一時汚れがひどくなったものの、昭和55年から始まった市民運動による清掃活動で、現在では清流を好むヤマメやイワナが生息できるレベルまで回復した。しかし、清掃活動の年間参加者は、高齢化、若者の減少の影響もあって12年の約10万3000人をピークに、17年に約8万5000人まで減少し先行きに対する心配の声が上がっている。

この地域独特の水辺環境や農村文化を後世に伝え、また、昨年8月末に発生したような大規模水害から人命を守っていくためには、クリークの重要性を周知し、維持管理活動への参加意識の向上を図っていくことが求められる。(佐賀支所/不動産鑑定士・梅本龍)